北陸地方に伝わる虫送り行事

友　永　冨
（福井県農業試験場）

虫送り行事は古来稲作と密接な関係を持ちつづけてきた。このごろはこれらの行事もかなりすたれてきたが，むかしのままに受け継がれているのもある。

この小品は北陸地方の虫送り行事を集録したものである。稿を草するにあたって，協力をいただいた柴田喜久雄・斉田正雄・武田吉三郎・常楽武男・堀竜蔵・沖野清作・柏島好治・池屋重吉・白尾由次郎・小林与右衛門・杉浦茂・渡辺政士・倉矢寛・月田豊・町村徳行・服部伊楚子氏らに深謝する。また平素高教をおしまれない長谷川仁氏の学恩に対してもここに銘記してお礼を申しあげる。

新潟県の巻

西・山口[24]の報じた新潟県東蒲原郡三川村上綱木の虫送り行事は1962年を最後として中止されてしまい，同県下の虫送り行事はまったく姿を消したようである。

富山県の巻

富山県では，ねつ送り[13),41)]・熱送り[26),35)]・ねつ送りまつり(祭)[13),36)]・ねつおくり[33)]・ムシオコル[32)]・虫送[40)]・むしまつり[42)]と称して以前は県内広く行なわれていた模様である。これらのうち，いまでも盛大に行なわれているのは，西砺波郡福光町（北陸本線高岡駅下車城端線乗りかえ福光駅下車）の**ねつ送りまつり**である。

ねつ送りまつりは福光町・観光協会・商工会・各農業団体の主催のもとに，福光・荒木の両区で毎年７月22日か23日（土用三番の日）に催される。福光区の場合は，商店街の戸毎に，こどもたちの願いごとを書いた，五色の短ざくや色紙をつけた，葉タケが立てられる。氏神の宇佐八幡社では神前に「祈五穀豊穣（じょう)」のノボリをそえ，ジジ・ババの乗った車輌式の舟（長さ10〜12メートル）を安置し祈願祭がある。式が終わると，ジジ・ババに御神酒（おみき）を注ぎ，ひととき太鼓の自慢打ちがつづく。あとは，壮年のものが舟をひき，それに葉タケを持ったこどもたちと太鼓もちが隊列をつくってつづき，おもな農道を**送るバイ，送るバイ，熱送るバイ**と連呼しながら進む。隊列は，随時，葉タケで田面を清めるようになでたり，立ち止まって太鼓の曲打ちを披露したりする。

昔は舟を小矢部川に流したが，1965年から永久保存用に改めたという。荒木区の場合は，その当日の午前中，農協支所で長さ約４メートルの舟やそれに乗せるジジ・ババの人形をつくる。ねつ送りまつりは午後２時すぎから始まる。まず，舟をかつぐものや太鼓持ち・葉タケをもったこどもたちなどが太鼓道と呼ぶ農道上を練り歩く，連呼のしかたや田面をなで清める仕ぐさは福光区と同じである。

福光町のねつ送りまつりは戦時中も休まずつづけられたそうで，これが地元の人たちの自慢である。虫送りの起源は寛永のころ（1624—1643）から伝えられているともいわれるが[21)]，元禄元年（1688)[13)]・寛政５年(1793)[13)]・天保８年（1837)[13)]・慶応４年（1868)[40)]の虫送りに関する古文書があることなどからすると，元禄時代(1688—1703)前後に始まったもののようである。ただ往古の虫送りがねつ送りまつりすなわちいもち病を意味するまつりに転化したいきさつや年代は明らかでない。

石川県の巻

石川県の虫送りについては清水[6),30)]・石川県能美郡役所[10)]・小田[26)]・長岡[22)]・石川県[11),12)]などの文献にみられるが，明治末年ころまでに，害虫駆除法（1896）や害虫駆除法施行規則（1897）の発布でほとんどすたれたらしい[11)]。

こうしたなかで，石川郡松任町横江（北陸本線金沢駅下車・松任行バス横市下車）の**虫送り**行事だけはいまでも続けられており，同町の無形文化財（芸能）（指定1964）になっている。区の集会決議録によるとこの虫送りは毎年７月21日ときめられている。田植えが終わると青年団の太鼓打ち練習が始まり，虫送り４—５日前には区長の触れで虫送り道の清掃が行なわれる。当日は青年団が宇佐八幡神社から田中区に通ずる道路上にアーチをつくったり，神社境内に相撲場をつくるもの，太鼓の胴締め調節をするグループなどに別れて準備する。午後８時ころになると大小さまざまなたいまつをもったこどもたちが公民館前に勢ぞろいする。行列は太鼓持ちを先頭にたいまつをもったこどもたちがこれにつづき，ところどころで休んでは身ぶりおかしく太鼓をうちはやす。ときには，飛び入りの老人が老練なわざをみせる一幕もある。虫送りの隊列は部落を一巡するとアーチのところに出るように行進していくが，ちょうどそのころ，油をしませたアーチに火がつけられ，夜空に"虫送"の文字がくっきりと浮かびあがる。一行は燃えさかるアーチの下をかいくぐって八幡神社の境内に集まり，山積みしたワラに次々とたいまつを投げこみ，そのあとは，忠魂碑前にしつらえた土俵で草相撲に興じ短かい夏の夜をすごす

こととなる。ただ，ここには福光のような虫送り歌はない。アーチは虫送りに興をそえるため，1955年中川喜八氏が青年時代に考案したのに始まるといわれる。石川県での虫送りの起源[30)]は福光地方と同じ加賀藩領であったところから元禄時代前後から行なわれていたようである。

福井県の巻

福井県では虫送り[5)・9)・29)]・こんか虫送り[4)・15)]・七夕(たなばた)祭り・虫供養[7)]として知られ，現在なお受け継がれているのは鯖江市莇生田町の**こんか虫送り**，武生市太田新保町の**七夕祭り**，敦賀市色町の**虫供養**である。鯖江市莇生田町（北陸本線鯖江駅下車，河和田行バス堂ノ下下車，徒歩10分）では7月23日の地蔵祭りの日にこんか虫送り（こんか虫払いともいう）が行なわれる。地蔵祭りの参けいに村びとが出そろったころ，男の子たちが手に手に火をつけたたいまつを振り回しながら**こんか虫おーくろ，こんか虫おーくろ**と叫びつつ地掛りの水田を巡る。河和田村誌[15)]に**こんか虫おーくろ，直江までおーくろ**というこんか虫送り歌がみえている。歌の文句の直江は現鯖江市南井を誤って記したものと考えられ筆者がさきに紹介した[37)]斉藤実盛の出生地をさしていると思われる。

武生市太田新保町（北陸本線武生駅下車。四ケ浦行バス太田新保下車）では七夕祭りのあとたいまつに火をつけたこどもたちが，**大樋まで送ろー，大樋まで送ろー**と叫びながらたんぼ道を水下の方へ練り歩く行事がある。松浦茂氏が筆者に語ったところによると七夕祭りと虫送り行事がいつの時代か混同して行なわれるようになったものだという。

敦賀市色町（敦賀港発不定期便色浜下船・最近陸路も開発された）では田植えが終わったころ供養が行なわれる。広瀬[7)]も報じているように虫供養の日取りは田植えが終わったころを見計らい，区長が代表になって，日蓮宗本隆寺に注進して決める。寺には「色ケ浜本隆寺年中行事」[3)]と書した文書がある。それによると「此月虫祈祷有リ日ハ不ス　定マ仏前ニテ広要品墓ニテ方便自題回向ノ事　但シ五色紙村ヨリ持来ル是ヲ小幡ニシテ経文ニ書事小幡ニ書事虫払五穀成就之処　御酒二升村ヨリ来ル合所ニテ呑テ帰ルナリ」とあり，いまもこの形式にのっとって仏前に虫払五穀成就のハタをたてたごはんとタケ筒に入れた虫・清酒1升をそなえ長い供養を営なむ。このあと僧りょを先頭に虫の入ったタケ筒をもっただんか一同がつづき，開山堂横の善徳虫塚に至り，虫筒を墓におさめて墓前祭をとり行なう。

終わって再び寺にもどり，酒をくみかわして各戸一本ずつのハタをもらって帰宅する。ハタはのちに各自の持ち田に立てられるのである。隣接の浦底町清流山妙泉寺でも毎年6月に虫供養を営なんでいる。この場合，ハタには「南無妙法蓮華経」と書いている。

福井県の虫送りについては天保14年（1843）[23)]・嘉永5年（1852）[34)]・安政元年（1854）[5)]に行なわれていた記録が散見される。おそらく藩政時代には一般化していたのであろう。

考　察

1)　**虫送りの語彙(い)**　民俗学研究所編綜合日本民族語彙[17)18)]や柳田[43)]によると，サネモリオクリ・サバエオクリ・サバオクリ・ムシオイ・ムシオクリ・ムシオトシ・ムシオドシ・ムシカミオクリ・ムシマツリ・ムシマジナイ・アマコオコリ・イネノムシ・イナゴサシマツリ・ノグリ・マエガキ・ムケムシなど多くの例証が示されている。北陸の場合は富山県で虫送りがいつの間にか転化したねつ送りまつりが行なわれており，福井県ではこんか虫送り・七夕祭り・虫供養が行なわれている。

2)　**虫送りの起源**　島田静雄氏によれば（1966・私信），すでに古語拾遺（806）に防虫のための祈りの作法が記されているという。しかし，たいまつを燃やし鐘太鼓をならしたり人形をつくる習俗は，大蔵永常の除蝗録（1823）[8)]をもって最初とするようである。わが北陸の虫送りの史実で明らかなものは元禄元年（1688）で，記録としてはかなり古い。

3)　**虫送りの時期**　青木ら[2)]によると，時期は田植え前・田植え後の二時期があり，後者は定日と不定日に分けられるといい，民俗学研究所編「年中行事図説」[19)]では害虫の発生をみてから行なうことが多く期日は一定していることが比較的少ないと述べている。西川[20)]は田植え後または害虫発生後に行なうものとに分けている。北陸地方のそれはいずれも田植え後に行なっており。敦賀市色町の虫供養の不定日であるのを除けば，いずこも毎年定日になされる。

4)　**虫送り様式**　青木ら[2)]はA形（人形をつくる）・B形（小さなミコシをつくる）・C形(簡略形でムシをつとに入れる）・D形（虫の代わりにダンゴやモチを用いる）の4形を挙げ，金塚ら[14)]は山間部の純粋型と低野部の七夕型・虫送りと七夕を別途にそれぞれ行なう中間型とし，岡本[27)]は神社仏閣にあつまって祭りをする形・行列をつくる形（人形をつくるものやササタケを中心にするものとある）に分類している。北陸地方では神社仏閣にあつまり行列をつくる複合型が多く，A形（福光・荒木）・たいまつを中心とするもの（横江・莇生田・太田新保）・C形（敦賀市色）があり富山県から南下するにつれてC形化している。

5)　**虫送りの意義**　民族学研究所編「綜合民族学語彙」[17)・18)]には，虫送りを信仰・年中行事・呪術（じゅじゅつ）の部に掲げ，柴田ら[23)]は実際的方法と祈とう的方法の二法あるが根元的には信仰説をとり，酒井[31)]も柴田らに同調した見解を示している。西川[20)]は昔の害虫防除法として効果は絶大なるものであるとし，松村[16)]は害虫予防法の発響・燈火誘殺法のひとつとして紹介している。宇野[33)]によれば呪術は広義の宗教であり（呪術を広い意味に理解しても宗教に包括されない独自の領域の残ることもある）

原始時代の科学で科学技術と不可分なものであるという。筆者はその年の豊作を祈る素直な宗教心の発露であり，また往古は最新の科学技術でもあったと解したい。

6) 稲の移動経路との関連　安藤[1]は，わが国の稲作は南方民族が江南地方から西歴紀元一世紀ころ北九州や朝鮮に移入したのに始まるという学説を発表した。これは従来発表されていた南方説・北方説・南北二元説にくらべもっとも信頼に値する結論[25]とされている。マレイシヤのサラワク地方のイバン人は「害虫の被害の甚だしいときは三日間の忌休みをしてから utap の葉で小さい舟をつくり，雀でも蝗でも稲を害するものの一つを捕えて此舟にのせ，これに食物をも入れて河に流す」（宇野[38]）という。将来，東亜圏全般にわたって虫送り行事の体系化が広くなされた暁には，稲作の移動経路究明に大きく貢献することであろう。このような研究は民族学的重要課題といえなくはなかろうか。

結　　論

北陸地方の虫送り行事にねつ送りまつり（福光・荒木）・虫送り（横市）・こんか虫送り（莇生田）・七夕祭り（太田新保）・虫供養（敦賀市色）が現存し，なかでも虫送りが転化したねつ送りまつりは民俗学的にみて新知見と思われる。これらは元禄時代（1688—1703）前後にすでに行なわれていた形跡がある。虫送りは田植え後定日に行なうものがほとんどで，その様式は舟（人形）を中心とする形（福光・荒木）とたいまつや虫筒を中心にした形まであり富山県から南下するにつれて後者の様式をとる。これらを通じて，将来，東亜圏の稲作儀礼解明によりわが国への稲作移動経路追求の論証をえたいと考える。

引 用 文 献

1　安藤広太郎（1951）日本古代稲作史雑考：1—52. 東京・地球出版　2　青木重孝・薄冬人・森谷周野・駒形覐（1962）新潟県文化財年報第 4 阿賀：247—248.　3　御代田泰音蔵（1907？）色ケ浜本隆寺年中行事　4　南条郡教育会編（1934）福井県南条郡誌：315—324.　5　福井県坂井郡浜四郷村編(1956) 浜四郷村誌：420.　6　清水隆久（1961）横江史：343—365.　7　広瀬栄（1939）敦賀郡市昆虫誌(福井県）：140—142.　8　日野巌（1949）植物病学発達史：117—118. 東京・朝倉　9　堀口久夫(1955) 若狭の風俗：12.　10　石川県能美郡役所編（1923）石川県能美郡誌：781.　11　石川県（1931）石川県史第 4 編：887.　12　石川県（1940）石川県史第 3 巻：866—867.　13　石橋直義（1965）日本民俗学会報 No. 38：11—21.　14　金塚友之亟・芝中生徒有志共編（1936）高志路 2—6（通巻18）：27.　15　河和田村小学校編（1937）河和田村誌：418.　16　松村松年（1930）農昆虫学：22—28. 東京・刀江　17　民俗学研究所編（1955）綜合日本民俗学語彙第 2 巻：640—642. 東京・平凡社　18　民俗学研究所編（1956)綜合日本民俗学語彙第 4 巻：1555—1558. 東京・平凡社　19　民俗学研究所編（1964）年中行事図説：166—167. 東京・岩崎　20　西川八十一(1939) 青森県農会報 No. 314：10—14.　21　野島好二(1948) 越中新風土記：174. 富山・中田　22　長岡博男（1954）石川文化シリーズ 郷土の年中行事：53—55.　23　羽田光義（1958）西谷村史：191—192.　24　西・山口（1962）高志路196：15—19.　25　日本学士院（1964）明治前日本農業技術史：33. 東京・丸善　26　小田吉之丈編（1929）加賀藩農政史考：207. 東京・刀江　27　岡本大二郎（1965）広島虫の会会報 No. 4：121—123.　28　柴田常恵・小寺融吉・中山太郎・花見朔巳（1935）郷土史研究第壱輯：20-22. 東京・雄山閣　29　沢崎正一（1950）福井県南条郡湯尾村誌：39.　30　清水隆久（1957）近世北陸農業技術史—鹿野小四郎農業遺書を中心として—：114—116. 片山津教育委員会　31　酒井卯作(1958) 稲の祭：182—194. 東京・岩崎　32　佐伯安一（1961）砺波民族語彙：120.　33　沢崎彬（1965）富山農技12(7).　34　武生市公民館蔵 差上申御礼之事.　35　富山県郷土史会（1959）越中伝説集：140.　36　武田吉三郎（1961）植物防疫15(10)：37—38.　37　友永富（1965）北陸病虫研報 No. 13：97—101.　38　宇野円空（1944）マライシヤに於ける稲米儀礼：264. 東京・日光.　39　宇野円空（1944）宗教民族学：131—160. 東京・八州　40　米沢図書館蔵　西砺波郡戸出町十村河合禾氏御用留帳　41　湯山泰佑（1955）農業北日本 6(11)：32—35.　42　漆間元三（1957）富山県歳時習俗：74—75. 富山・高志人社　43　柳田国男（1963）分類祭祀習俗語彙：293—296. 東京・角川

北陸の虫送り（I）

富山県福光のねつ送りまつり

石川県横江の虫送りアーチ

富山県荒木のねつ送りまつり

福井県莇生田のこんか虫送り

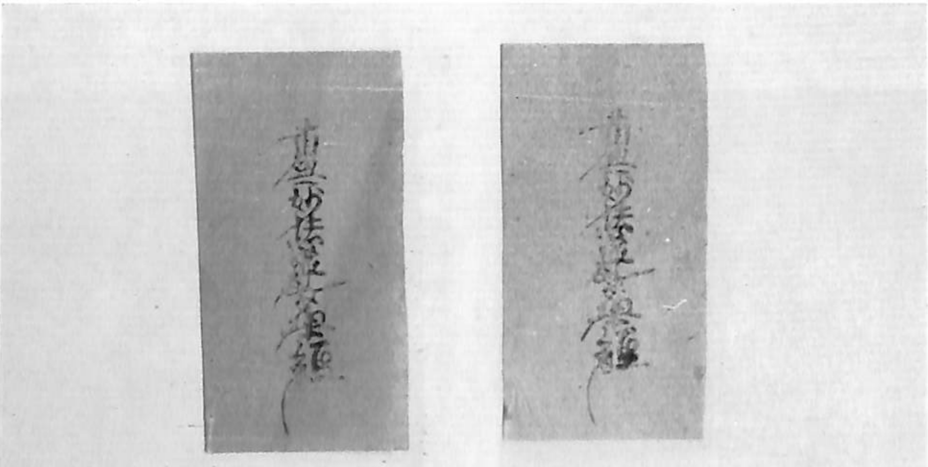
石川県横江の虫送り

（友永原図）

北陸の虫送り（Ⅱ）

福井県敦賀の虫（色の虫）供養。
祭壇とその供物。

福井県敦賀の虫（色の虫）供養。
墓場での読経風景



福井県敦賀市浦底で虫供養に使うハタ

（友永原図）